



いとう



海援隊旗(二叟きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

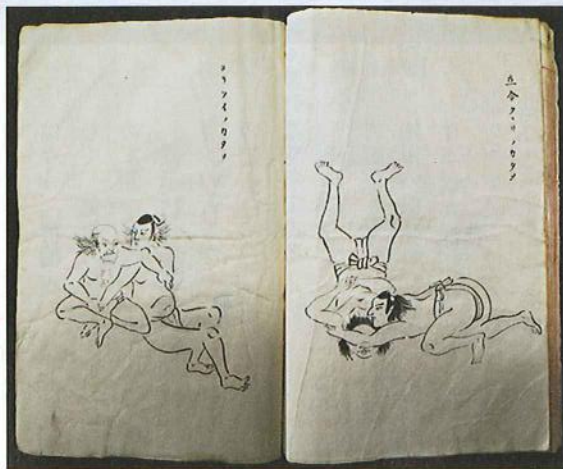
快刀 KAITO RANMA 乱麻

「土佐の武術」展

武芸免状は武家社会の魂、幕末土佐で活躍した人物の免状を展示

「土佐時代」の龍馬は小栗流

武家社会を支えたものに武道・武芸があるのと言つてもいい。それはまた、地域によって異なりそれぞれの文化を作り上げている。ただ土佐の武術に関する研究は、平尾道雄氏の「武術史話」以来まとまったものがない。この展示を機会に、史料の発掘や研究が進むことを期待するとともに、土佐の道場で仲間と切磋琢磨し、師弟関係で多くを学んだ若き日の龍馬たちに思いを馳せていただければ幸いである。



小栗流和摺語録

地域によって異なる武術と流派

「武術」には、剣・槍・棒・砲・馬・弓・鎖鎌・手裏剣・柔・水練など、実にさまざまの種類がある。また、武術にはその技を継承する「流派」があり、剣術以外に複数の武術を教えるなど、流派によつ

小栗流ならではの伝書も

今回は、おもに幕末の土佐で活躍した人物の免状類を中

て違いがあらわれる。例えば、知られている龍馬の剣術といえば北辰一刀流であるが、土佐にいたころの龍馬は小栗流という流派で学んでいた。同様に鏡新明智流の武市半平太は、元は小栗派一刀流である。土佐には土佐の人が学ぶ流派があった。またそればかりではない。小栗流を学んでいたころの龍馬は剣術のほかに、柔術や棒なども学んでいる。

心に展示する予定である。吉田東洋を暗殺した大石団蔵の無外流免状(高知県立図書館蔵)、浅山一伝流の師範であった那須俊平(那須信吾の養父)所用の槍の柄(橋原町歴史民俗資料館蔵)、武市半平太の一刀流免状(高知県立歴史民俗資料館蔵)などである。なかでも龍馬が学んだ小栗流については、龍馬の師である日根野弁治の係累で、龍馬と同時代に小栗流を修めた市川元衛の免状と、「小栗流和摺語録」(高知市民図書館蔵、写真)を展示する。「小栗流和摺語録」は、和術を得意とする小栗流ならではの伝書で、巻末には「小栗流和組物之図」として、「ヒツシノカタメ」など二十九種類の固め技が図で描かれている。免状などでは技の名前のみが知られる場合が多いなか、具体的に非常に興味深い資料である。

「山北棒踊り」を上演

小栗流についてはさらに、県無形民俗文化財に指定されている「山北棒踊り」を記念館八策の広場で「山北棒踊り保存会」に披露していただく予定になっている。「山北棒踊り」は香南市香我美町山北に伝わる、小栗流棒術の流れをくむ伝統芸能である。ぜひごらんいただきたい。

亀尾 美香

関連行事

■山北棒踊りの実演 十月五日(土) 午後二時より



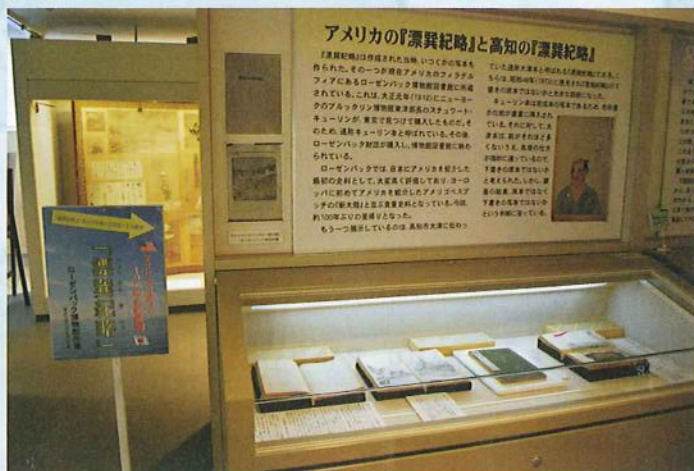
山北棒踊り

大津本の活字化、研究が大いに深まることを期待

『漂異紀略』に見る万次郎の世界』展

会期・平成25年5月18日〜7月19日

『漂異紀略』展は、残り3週間を切った。今回の展示は初めてのことが多く、不安が多かった展示だが、これまでの所、アンケートでは概ね好評を得ている。やはり一番の見どころは、アメリカから100年ぶりに里帰りした『漂異紀略』（通称・キューリン本）である。アメリカのブルックリン美術館や現在の所蔵先であるローゼンバック博物館図書館で大切に保管されていたため、保存状態が良く、鮮やかな絵の具の色が、当時に近い状態で残っている。



『漂異紀略』キューリン本

異紀略』は日本で作られたことが明白なので、輸入ではなく、再輸入になるらしく、免税となることも初めて知った。展示にこぎ着けるには多くの苦労があったが、その価値は十分にある貴重な史料である。そのキューリン本と並んで展示しているのが、高知市の松岡家が所蔵し、現在当館に寄託していただいている『漂異紀略』（通称・大津本）である。こちらは、状態こそ良くないが、中身は超一級品である。キューリン本や他の写本

開館以降初めて海外から史料を借りて、その史料のために、初めて夜間警備員も雇った。資料保護の観点から、展示室は通常の企画展示コーナーではなく、初めて地下2階常設展示室だけの開催となった。海外から貴重な史料を借りる時には、税関で通関手続きが必要であるが、『漂

類と比べると、文章表現がことごとく違っているため、今後『漂異紀略』の研究を行う上で、鍵になるものだと思う。今回の展示では、『漂異紀略』の成立過程の解明などをテーマとしていたが、答えを出せない部分が多々あった。しかし、大津本の活字化を



「ライマン・ホームズ航海日誌」

行い、出版できたので、今後、研究者の方々に活用していただき、研究が大いに深まることを期待している。その他、財団法人ジョン万次郎ホイトフィールド記念国際草の根交流センター所蔵の「ライマン・ホームズ航海日誌」も貴重な史料である。ジョン・ハウランド号乗組員の航海日誌で、万次郎らを鳥島で発見した時の様子などが記録されており、大変興味深い。

シンポジウム・ジョン万次郎サミット情報

7月13日(土)には、当館と土佐ジョン万会の共催で、『漂異紀略』及びジョン万次郎に関するシンポジウムとサミットを、当館隣の国民宿舎桂浜荘で行います。先着150名。

◎シンポジウム 13時30分〜16時20分

◎各団体の活動報告

「漂異紀略」とジョン万・龍馬
—現代へのメッセージ—
パネリスト

- 北代 淳二氏 (ジョン万研究者)
 - 永国 淳哉氏 (ジョン万研究者)
 - 小美濃 清明氏 (龍馬研究者)
 - 三浦 夏樹 (当館学芸員)
- 13時35分〜14時35分 4人から報告
14時40分〜16時10分 討議
16時10分〜16時20分 質疑応答
16時20分〜17時 企画展見学

◎ジョン万サミットin高知 17時〜18時30分

◎各団体の活動報告

沖縄ジョン万会(万次郎帰国の地)
江東の会(万次郎が11年過ごした土佐藩下屋敷のあった場所)
草の根交流センター

○山内家19代目当主・山内豊功氏講演
19時から懇親会を予定しています。一般の方もご参加いただけますので、ご希望の方は10日までにお申し込みください。会費は4千円です。
連絡先・土佐ジョン万会事務局
電話 088-843-6007
三浦 夏樹

私のジョン万次郎論(中)

歴史研究家 永国 淳哉



歌が好きな万次郎

古里の国境で

万次郎たちを郷里まで護送するため、土佐藩より十三名の役人が差し向けられていた。牢番役人の二人もいて道中見張りしているし、医者も三人いた。こうした厳しい警戒の帰路とはいえ、やはり同郷の者同士である。松山から三坂峠を越し、土佐の国境が近くなると、万次郎が唄い出した。
古里の夏の太陽がまぶしい。十一年半ぶりの古里の風だ。
「トマトカナシテテクテカラバサケンテン」
藤崎祥明筆「土州人漂流記(アメリカ流行の歌)」
(嘉永五年11852年)

お、スザンナを発見

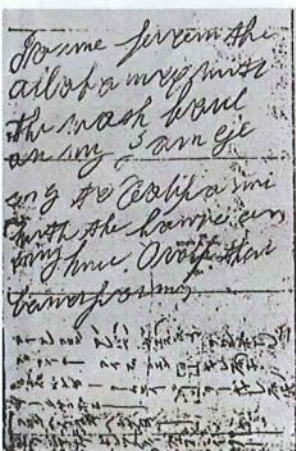
無粋なサムライ達も、立ち止まり、大拍手した。
万次郎は、次つぎとメリケン歌を披露した。
その和訳を聴き、書き留めた医者もいた。
「長崎より帰國の道唄え歌。亜墨利加國日本の詩歌の類有、又道中二而唄歌を演ふ。其文和解すれハ、むかふの坂を恋しき人が、パンを食う食う来る。目に涙をはさみて・・・」
(桜井正照筆「万次郎漂流細書」
嘉永五年11852年)
研究の結果、これは「お、ス

ザンナ」の二番の歌詞に符合した。
The buckwheat cake was in her mouth. The tear was in her eye...

人種差別問題の関係から、今日この二番目は、歌唱禁止となっていて、解りかねた。
日本で最初に唄われた英語の歌。それは万次郎が唄ったフォスターの名曲「お、スザンナ」であると発見した日は、嬉しくて眠れなかった。

高知城下で「お、スザンナ」

嘉永五年(1852) 七月十一日万次郎らは高知城下に着



河田小龍雑記メモ

「米利幹竹詩」の歌は何?

吉田東洋が「序」を寄せて、「土佐藩取調記録」として吉田文治正誉にまごめさせ、それが公表されたものが「漂客談奇」である。

その中に、アメリカ流行歌を漢詩化した頁がある。題して「米利幹竹詩」とあるが、何だろう。漢詩に詳しい濱田龍雄氏(南国市才谷)によれば、「竹詩」とは、「唐の『劉禹錫』に始まる土地の風俗や男女の情事を詠する詩の一体」という。濱田さんに手伝って頂いて、ルビをつけてみた。

- (一) 柳影 杵聲 秋正忙
- (二) 村村 靈盡①登場
- (三) 芳倍 取醉 鴉片煙 厭
- (四) 遠山 沿水 達王都

自然への賛歌を詠う冒険者

こうした土佐帰郷時の万次郎の歌を調べてみると、その愛唱の基盤が、自然への賛歌であることに気づく。

海外十一年の大半を大海原の上で生活してきた二十五歳の若者の愛唱歌は、「平原」「山」「大地」「大洋」・・・大きなスケールの自然の歌である。
土佐帰郷の翌年(1853年)、万次郎が筆書きした自然賛歌の英詩が高知市の間崎家に遺されている。韻もふんでいるスケールの大きな自然の詩である。
Heaven and Ground
Day and Month, Land
River Sea and Wind

また、万次郎の唄っている俗謡も面白い。いかにも青春の若者らしく愛の葛藤を詠う「男と女」「港の女」など、マドロス気分が唄っている。
一方、政治的な「道路」都などの「国王」の歌も堂々とテモクラシーの本命を唄っている。琉球本島に帰還するため買ったポルトに、自らアドヴェンチャー(冒険者)とつけている。まさに万次郎は、パーフエクトな冒険者である。

天誅組義挙150年を機に

高知県津野町から奈良県東吉野村へ



那須信吾最期の場所



天誅組志士たちの菩提寺・宝泉寺

奈良県吉野郡東吉野村。桜の名所吉野千本山から少し離れたところにあるという東吉野村とはどんなところだろうか。そんな思いのまま長い時間が経っていた。ようやく機会を得て、桜花が葉桜に変わる頃に同村を訪ねた。同行は、吉村虎太郎の生まれ故郷・高知県津野町の川上一郎教育長や、森健志郎龍馬記念館長らである。出かけてみると存外大阪から近い。

東吉野行きのきつかけは、水木実村長を中心とした実行委員会主催の東吉野村天誅組150年顕彰記念事業への参加である。森館長が連続講座初回を担当したのだ。同村はじめ近隣の関係市町村の方たち300人以上が会場に詰めかけ、館長

藤本鉄石(1816-63)、松本奎堂(1832-63)、吉村虎太郎(1837-1863)の三総裁率いる天誅組が玉砕した東吉野村は、150年経った今でも天誅組をしっかりと顕彰している。その話は見事に本音だった。掃き清められたような天誅組関係者の墓所を巡り、ゆかりの場所を訪ねて、それを確認した。今は植林された杉ヒノキが大きく育っているが、なだらかな丘のような地形を縫って、天誅組が幕軍と戦った跡も、当時の様子に思いがめぐった。



天誅組総裁・鉄石や奎堂らが眠る湯ノ谷墓所



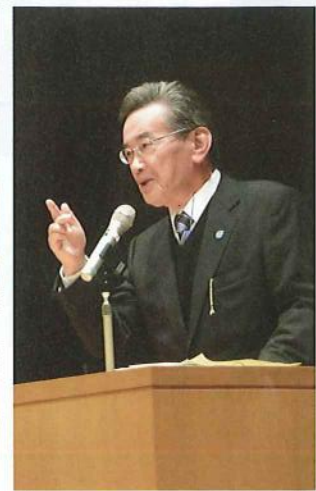
吉村虎(寅)太郎墓所

の話に大いに沸いた。秋には「天誅組サミット」もある。村長はじめ村内の皆さんが天誅組のはっぴを着て顕彰活動する様子、津野町との友好関係。異郷で果てた若者たちの無念が、150年を経て関係市町村を活気づけているように見えた。

村の様子などを紹介する
前田 由紀枝



講演会場は大勢の人であふれた



「龍馬の先を駆けた男・吉村虎太郎」熱弁をふるう森館長



虎太郎が最初に埋葬された原塚処

聞き書き

妻 眞喜子が語る「作家・宮地佐一郎の思い出」②

『作家への志』

二人の出会いと、脱藩

眞喜子と佐一郎の出会いは終戦後間もなくのことである。眞喜子は終戦で、家族とともに韓国京城(現・ソウル)から母の故郷佐賀町(現・高知県黒潮町)に引き揚げ、中村高等女学校に編入後、高知市に出て高知師範学校(現・高知大学教育学部)に在学していた。朝倉の伊野部家に下宿し、そこで友人3人と暮らしていた。その伊野部家で、中学校教員をしていた佐一郎と出会った。



新婚の頃の佐一郎と眞喜子。佐一郎は犬の猫好きだった。

「佐一郎さんの実家は伊野部さんご近所で、伊野部家で謡などをするときに来ていたの。私より6歳年上で、総髪の変った人だなと思いましたが、あるとき大学の図書館で出会って話をするうち、お家に本がたくさんおありのようで、これなら図書館に行かなくていいわ。と親しくなっていました。」
佐一郎は、長い髪をなびかせて高知大学のキャンパスを馬で走らせた。当時でも人目を引く人であった。法政大学卒業後、故郷高知で中学校教師となった佐一郎が、大陸生まれの利発でチャーミングな眞喜子に惹かれていったことは想像に難くない。しかし二人は惹かれあつていく。
眞喜子は師範学校を卒業。1年ほど佐賀町で教職に就いた後、佐一郎と結婚した。「私ね、本当に子どもでしたのよ」という、20歳そこそこの若い妻であった。



亀井勝一郎(前列中央)を囲む「詩と眞實」同人たち。亀井の左後ろが佐一郎。

高知で「無頼派」を名乗り、文学者や絵描きと交わっていた佐一郎は、「作家になる」ことを決意した。そのための脱藩であった。
小さなこと、例えば眞喜子とのつきあいで噂になるような土佐を脱藩し、志を立てるための上京である。あてはあった。いや、あてというよりは賭けに近いものだ。
「佐一郎さんは敬愛する亀井勝一郎先生に会うために、先生の居る武蔵野市吉祥寺に住まいを借りました。六畳一間の本当に狭い新居でした。それでも、『天和古寺風物詩』が好きで、学徒動員中にも先生の書を持って奈良を巡った佐一郎さんにとって、うれしかったと思います。たまたま佐一郎の親戚に、亀井の妻・妻子夫人の大学時代の同級生がいて

そのついで上京後すぐに二人は亀井家を訪ねた。
「お宅を訪ねると亀井先生は『あつ、宮地君来たの』といって、旧知のように迎えてくれました。直接会えるかどうか分からなかったのに、運がよかったのですね。それから佐一郎は、兄の家に行くように気軽に亀井家に入り、本を読んだりして過ごすようになった。
「亀井先生は私を眞喜ちゃん、眞喜ちゃんと言って可愛がってくれました。奥様も、あなたはお茶をやった方がいい。といって表千家不白流の高名な先生を紹介してくださった。私が茶道をやることは佐一郎さんも大変喜んでくれました。」
といつても、佐一郎の収入が定まっていたわけではない。お茶の先生は、茶道雑誌「ゆきま」での歴史もの連載を佐一郎に依頼し、その原稿料で月謝を払うようにしてくれたという。
「私は亀井先生の書齋が大好きでした。炬が切つてあつて、『眞喜ちゃん、お茶にしよう』なんて声をかけてくれましたね。亀井先生を訪ねて武者小路実篤先生もいらしてました。お茶を飲みながらね。亀井家は、作家宮地佐一郎を育てる格好の場所になっていた。
亀井勝一郎を師と仰ぎ、同人誌『詩と眞實』の同人となった佐一郎の家には、多くの文学者らが入り込んでいた。眞喜子は

「中でも尾崎秀樹さんは、なかなかの美青年でしたよ」と懐かしそうに振り返る。武蔵野の家は玉川上水の近くで、大宰治の桜桃忌には必ず出席するようになった。そこでもまた多くの知遇を得たという。
そうした中で、初めて書いたのが『野中一族始末書』(1963)。その後、三度の直木賞候補となった作品を書き上げて行くのである。
「龍馬ですか。佐一郎さんは高知にいた頃から資料は集めていましたよ。脱藩すると言つて高知を出たのに、高知にはいい資料がある。歴史の宝庫だ。魚がうまい。とか言つてよく帰るようになりました。」
前田 由紀枝 (文中敬称略)

■宮地佐一郎(1924-2005)高知市生まれ。法政大学国文学部卒業。亀井勝一郎を師とした。日本文藝家協会会員。初の出版作『野中一族始末書』で大仏次郎の知遇を得る。「開道絵図」宮地家三代日記「菊酒」の三作品が直木賞候補となった。その後、坂本龍馬研究に没頭。
『坂本龍馬全集』中岡慎太郎全集等多数。※大宰治(1909-48)小説家。その作風から新劇作派、無頼派と称された。玉川上水で入水自殺。大宰をしのぶ桜桃忌には法要が営まれる。
※無頼派⇒敗戦直後、織田作之助、坂口安吾、大宰治、壇一雄ら一群の文学者への名称。戦後の虚脱、混沌の状況の中で、既成の文学観や方法が無効だとした。
※亀井勝一郎(1907-66)文芸評論家。運動に参加後、親鸞に傾倒。歴史と日本人の実体を探求した。「天和古寺風物詩」日本人の精神史研究」等。
※武者小路実篤(1885-1976)小説家。志賀直哉らと雑誌「白樺」を創刊。「新しき村」をつくり、人生肯定・人間信頼を唱えた。
※尾崎秀樹(1928-99)文芸評論家。ソルゲ事件の真相解明に携わり、大衆文学の研究・評論などした。

拜啓 龍馬 殿

121通

平成25年3月21日〜6月20日

一年ぶりですね。ずっと忙しくて伺えませんでした。今年も無事卒業式が済みました。東京の桜は子ども達のために急ぎ満開になり、あたたかく気持ちのよい卒業式となりました。四月からは気分一新。新しい一年がまた始まります。私の教員人生あと五年。いくつになっても子どもの個性との闘い、教材研究の難しさ、事務仕事の量の膨大さは変わりません。いや、年々困難が増しているように思います。くじけそうになると、龍馬さんを思い出して自分を奮立たせました。今回もそのエネルギーをいただきに来ました。花でいっぱい五台山や広い広い太平洋を見てエネルギー充填1200%です。

(3月23日) 東京 C・E 55歳 女性

ぼくははりょうまの本を30回いじょうよんでいます。今日見たのは3月27日にたんじょうびだからです。みまわりぐみをなでりょうまさんをころしたんだーと思います。けしてりょうまさんのことをわすれません。

(3月25日) 愛知 Z・K 男子

龍馬さん、わが家の龍馬も13才になりました。勉強に部活にがんばっている日々です。泣き虫は卒業しました(笑)少しづつですが、あなたに近づいていると思います。また会いに来ます。成長した姿を見せたくて！

(3月26日) 広島 J・O 39歳 女性

私は歴史上の人物で龍馬さんが一番好きです。龍馬さんがもつと長生きをしたら、もつと歴史の勉強が面白かったと思うと残念でなりません。私も龍馬さんのように立派な人間になれるようにがんばりますので天より見守ってください。

(3月26日) 大阪 T・Y 15歳 男子

仕事で高知に来るチャンスがあり、子どもの頃から大好きだった龍馬さんが育った地をよく見てみたいという気持ちで桂浜まで来ました。幕までの足跡など活躍ぶりを深く知ることができとても感動しました。

(3月27日) 神奈川 S・A 43歳 女性

あなたに会いたくて東京から土佐まで来ました。お会いすることができて嬉しく思います。We Love Ryoma♡

(3月27日) 東京 S・U 男性

龍馬に憧れて江戸から土佐に車で行き来したと聞いて信じられないです。「日本を今一度」の言葉が大好きです。私は四月から東京で教師として働き始めます。教育には様々な問題がありますが、教師として「日本を今一度せんたくしたし申し候」

(3月27日) 東京 K・T 27歳 男性

今回で3回目です。最初は今の主人との初めての旅行

で、2度目は私の母と主人と3人で、そして今回は私の息子と主人と3人で来ました。息子の曾祖父(母の父)が土佐の出身で、息子に土佐の男の血が流れていること自分のルーツを知って欲しくてこの地に連れて来ました。龍馬さんのように真っ直ぐな気持ちで、自分の信念を貫ける男になって欲しいという息子への思いが伝わるように、龍馬さんも祈ってください！

(3月28日) 東京 Y・O 46歳 女性

また来てしまいました。久々に潮風を浴びたような気がします。家の近所に海があるというのに。日々仕事に追われ、今の自分を見つめ直すことができなかつた気がしてきました。小さな小さなことを気にしながら生活している毎日ですが、あなたはいつも大きな事を、それだけを考えて生涯を生き抜いたのでしょうか。あと二日滞在します。あなたのゆかりの地や勤王党の人々のゆかりの地を見てまわるつもりです。また来ます。次は、いや次も一人で来ます。

(3月28日) 山口 K・S 42歳 男性

限りなく広がる太平洋を見ているあなたは人間の可能性を信じ生き続けたのでしょうか。わすか33年という人生でしたが、きつと素晴らしい、誰も体験できない一生だったのではないかと。僕もあなたのようなニューモアなついで自信にみちた人生を送りたいです。

(3月30日) 京都 S・I 14歳 男子

僕は「龍馬」と名付けられた人間になって欲しいと言われます。正直、重いです。勉強も好きじゃないし、ケンカも強くない

11年振りに来ました！今年が勤王30年です！フレッシュな休暇が取得できるの大学生になった息子の龍馬と！いちゃん親子三代で絶対来ます！美しい桂浜と偉大な龍馬像を見せてあげたい気持ちでいっぱいです。龍馬殿待ってください。うちの龍馬を必ず連れて来ます！

(5月24日) 埼玉 S・Y 49歳 男性

私は40才にして苦勞の末、転職に成功し、インド駐在となり、世界へ旅立つこととなりました。グローバル人材の先人としての龍馬殿には是非我が行く末を見守り、世界を切り開く幸運に導いてくださるようお願い申し上げます。

(5月29日) 神奈川 S・N 40歳 男性

編集者より

今回は子どもさんからのメッセージがとても多く、全体の4割が20歳以下の方からでした。中には、大人顔負けの素晴らしい文章に、年齢を見て驚いたものもありました。3歳の子どもの手紙やお母さんの代筆でしょうか、「りょうまだいすきよ」というメッセージとともに、龍馬の似顔絵が描かれていたと思います。夏にはそんな龍馬が大好きな子どもさんにお集まりいただき「終戦記念日に誓う！第1回夏休み子ども・龍馬フォーラム」を開催いたします。子ども達だけでなく龍馬像を語るのか今から楽しみです。尾崎 由紀

ここは館長の部屋 森 健志郎

アイ シンク ソウ
地下展示室に展示中のアメリカ、ローゼンバック博物館から100年ぶりに日本に帰国したジョン万次郎の冒険談「漂浪紀略」が人気である。100年という時間の長さは当然だが、落ち着いた先が、万次郎の故郷「土佐」であり、また、「龍馬」の記念館というのが歴史のロマンを感じさせられて楽しい。万次郎、龍馬を結ぶ言葉「国際人」「アメリカ」というのがスケールを大きくする。夜間も警備員、冷房付きの要人対応だ。朝は必ずチェックに地下へ降りる。1ヶ月を過ぎると友達に挨拶するような感覚に。想像する。深夜、史料から抜け出した万次郎と龍馬が話し合っている姿である。もちろん、幕末の思い出話はあるだろう。その後は現代へと及ぶはず。とにかく揺れる世相だから、国内でも話のネタは尽きない。アフレ脱却、靖国、原発再稼働、尖閣諸島、いや竹島も、憲法96条問題もある。数えれば切りがない。龍馬が言った「お金は幸せ社会を創る道具に使うもんじゃろう？それが目的になったらいかんぜよのう、万次郎さん！」「そのとおり、アイ シンク ソウ(I think so)」。話は夜明けまで続く。

●人事異動●



人事異動のご挨拶
この春、副館長と職員一人の退職に伴い、新たな人事が発令された。

「龍馬伝」の再放送が始まり、再び熱中して観ています。また「龍馬がゆく」を読んで、龍馬を勉強中です。龍馬記念館は、太平洋が一望でき、素晴らしいロケーションです。多くの方に来館していただき、満足していただくよう、微力ながら頑張っています。

副館長 筒井 幹人
契約職員 森 愛

「龍馬讃歌披講式」の体験



「披講式」の風景

披講式？。歌に馴染みのない私には初めての経験だった。「披講式」とは、和歌に節をつけて詠み上げることで、冷泉流、綾小路流などの流派が存在する。現在では宮中の歌会始や神社での行事などで見ることができ、平安時代より宮中に伝わってきた古式ゆかしい行事だそうである。

増井はつこ代表の呼びかけで集まった歌を「龍馬讃歌百人一首」として発行。書家岡崎松雲氏が揮毫された色紙114点に、龍馬、龍馬の祖母・久女、父・八平、兄・権平の歌4首を加え計118首を展示、その中から8首が選ばれ披講された。当日は、京都から小倉百人一首を編まれた藤原定家のご子孫である下冷泉家第20代当主冷泉為弘様、美智子様ご夫妻も参加され、龍馬讃歌会の増井はつこさん、松田美津子さん、高知歌人会の岩崎朋子さんの5人で記念館の近江屋にて披講式が進められた。近江屋には平安時代の装束に身を包まれた出演者が並び、美智子様のご発声で最初の歌が詠みされた。澄んだ真直ぐな声が会場に行き渡り、後に続く役目の方は節を付けて詠んで行かれる。一瞬にして和歌の世界がそこにある。独特な時間の流れの中で詠まれる8首の歌を聞きながら、古き時代から続いて来た日本人の和歌の心に触れた気がした。最後は「文開く衣の袖はぬれにけり海より深き君が美心」という龍馬の歌で締めくくられた。式が終了し、参加された方たちの表情は、にこやかでとても清々しい印象を受けた。披講式という高知でも珍しい行事を体験出来たのは、やはりそこに姿なき龍馬の存在が有ると感じた1日であった。中村 昌代

■ ~龍馬、海へ、世界へ、宇宙へ、~『みんなあでシェイクハンドぜよ!』 角谷やすひと作品展

7月の展覧会



「海を渡るぜよ」

6年前に初めて高知に来て、真っ先に来た場所がここ坂本龍馬記念館でした。館内を廻ってギャラリーがあると知り、いつかここで個展を開催したい…!とっておりました。その念願が叶い、今回作品展が開催出来ることになり、本当にうれしくお思います。

今回の作品展のイメージですが、龍馬が生きていたらきっと海外へ行っていただろうということで、パリのエッフェル塔での龍馬、ニューヨークでの龍馬、イギリスロンドンでの龍馬、など海外での龍馬を面白おかしく描けたらと思います。新しいもの好きの龍馬ということで、船から始まり、自動車、飛行機、宇宙ロケット、(笑)。F1マシンに乗った龍馬や、F-15戦闘機に乗った龍馬なども展示したいと思っております。

また、会いたい人にはとにかく会う!そんな龍馬ですから、もっといろんな人に会ったろう、会いたかったらう…、そんなイメージでいろんな人(有名人)との「シェイクハンド」で締め括ろうと思っております。

作品を見ていただいたすべての人たちに少しでも、笑いや元気をここ桂浜から持ち帰っていただきたいと願っております。
角谷やすひと

■ 「“今を駆ける龍馬スピリッツ”春蘭二人」展

8月の展覧会

高知は、中央で高く評価され文化功労者となられた手島右卿先生、そして地元で長くご活躍された沢田明子先生を輩出した書のレベルの高い土地です。書に対する両先生の崇高なお考えと実行力に近づくべく、「暮らしの中の書」「芸術書と筆耕の共通点と相違点」をテーマに、日々探究し、研鑽を積んでいるところです。

この度、坂本龍馬記念館において、山沖は2度目の、酒井めぐみにとっては初めての展覧会の機会を与えて頂きました。

山沖は「エヘンの手紙」を現代書で、書への考え方を筆耕文字で手紙風に書きました。また、観る人が自由に解釈出来る墨象作品(墨の抽象表現)もごぞいます。酒井は龍馬さんの手紙を臨書、和歌を仮名で書き、墨象作品も作りました。その他、県産品の土佐和紙を使った風作品、自立式三枚連続模様の屏風等、「暮らしの中の書」として楽しんで頂けるような工夫もし、2人合わせて20点位の作品を展示します。

今こそ龍馬スピリッツ、伝統の書を礎とし現代の暮らしに合い品格のあるわかりやすい書風を心掛け、次代に繋げていきたいと思っています。楽しみに足を運んで頂ければ幸いです。
山沖 春蘭



「逢」作：山沖春蘭

■ 60回記念の年 踊りで1つに!!

あっという間には、はや夏間近。よさこい踊り子募集の季節がやってまいりました!今年よさこい祭りは60回目となる記念の年。

昨年に引き続き、桂浜一帯が協力して立ち上げた“桂浜・龍馬プロジェクトぜよ!”踊り子チームもパワーアップして参加することになりました。

坂本龍馬記念館も募集開始から大忙しです。今回は前回よりも県外の方からの申込が非常に多く、東京、千葉、大阪、兵庫、岡山…etcと様々です。踊りを共に踊るだけでなく、県内県外の方達にとって交流の場としても楽しめるのがよさこいの醍醐味だと思います。

それぞれ、違った環境の中にいた人々が踊りを通じて1つになる。なんとも言えない面白さがそこにはあります。それが、昨年、踊り子としてスタッフとして参加したよさこい祭りの感想です。今年の“桂浜・龍馬プロジェクトぜよ!”は昨年とは、また違った踊り、衣装で土佐の街を華麗に彩ります。あなたも龍馬やお龍になって土佐の暑い夏を体感してみませんか?ご参加お待ちしております!
西本 有里



入館状況

編集後記

2013年6月20日現在(開館以来7,845日)

- ◆総入館者数 3,391,259人
- ◆最多入館 (2010年5月2日) 6,686人
- ◆最少入館 (2004年10月20日、台風のため) 8人
- ◆2013年度最多入館(2013年5月4日) 3,087人
- ◆2013年度最少入館(2013年4月12日) 147人

不規則な梅雨の名残りを引きながら、もう夏号である。企画展はアメリカから100年ぶりの帰国となった万次郎の「漂異紀略」を中心に発信しているが今、一步の感じ。ただ、ここに来てそれが目当ての入館者がじわり増えてきた。窓の外では耐震ボーリング調査の機械音が途切れない。なんだか落ち着かないその雰囲気もろに原稿に現われてきたように思う。締め切り日に原稿がそろわなかった。理由はそれぞれだろうが気持ちの緩みもないとは言えない。自戒している。自らに言い聞かせ、さあこれから再チェック。ミスがあってはならぬ。思いのこもった“夏号”になった。
(モ)

館だより“飛騰”第86号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏
発行日 2013(平成25)年7月1日 〒781-0262 高知市浦戸城山830
発行 高知県立坂本龍馬記念館 TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休
入館料 一般500円・高校生以下無料
身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

第5回現代龍馬学会総会・研究発表会 ～現代龍馬学会5周年を迎えて～

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は、2009年4月に発足してから、この日で5周年を迎えた。5月11日には「時代の絆」をテーマにして第5回研究発表会を開き、県内外から150人近い熱心な人たちの参加もあって、盛況のうちに終えることができた。一昨年の東日本大震災を契機に、以前にも増して問われるようになった「人と人の結びつき」をめぐる「龍馬とその時代に学ぼうとしたのである。あわせて、ジョン万次郎を主人公にした長編小説『ジョン・マン』を執筆中の直木賞作家、山本一力さんにお越しを願い、「龍馬と万次郎」21世紀を生きるヒント」と題して講演をしていただいたことも、学会の発足5周年を印象づけるものとなった。

作家・山本一力さん大いに語る

「龍馬と万次郎」

「21世紀を生きるヒント」

土佐人と「いちびり精神」

山本一力さんは、現在連載20本を持ち、執筆と同時に国内外を取材旅行する、時の人である。そんな多忙の中での講演。学会員はもちろん一般参加者も多く、会場は気持ちのよい緊張感にあふれた。

「皆さんこうしてこの空間の中で一緒に話をさせてもらえると嬉しいのは本当にありがたい。」そう切り出した山本さんは、自身の体験を交えて、執筆中の龍馬やジョンマンへの思いを語った。一部を紹介する。

生まれ持った「星の強さ」

龍馬が黒船に出会ったこと、万次郎が出くわした様々なこと。それが歴史を作ってきた。つまり、その場に居合わせることで出来るかどうかという、その人間が持つ生まれた星の強さ。が歴史に関わっています。龍馬が黒船に出くわしたことなく、しようとして居合わせるといふことは、その人間が持つ生まれた星の強さ。です。私が龍馬に一番強く思うのは、その功績よりも

黒船が江戸に入ってきたときに、そこに居合わせることができた。星の強さ。です。中濱万次郎、ジョンマンも全く同じです。

今、龍馬記念館で特別展示しておられるジョンマンと河田小龍の「漂異紀略」。そこにポストンの教会が描かれています。私はその絵をもとにポストンを歩き、現場に立った。すえたか、よく分かった。深い入江、ものすごく深い海。大型船も楽に入ることが出来る。そういう港を、生まれて初めて見た万次郎の気持ちを考えます。

本にはない、初めての感動

龍馬や万次郎の体験を、我々は資料や本で追体験、疑似体験はできません。しかし、本では絶対に体験できないことは、初めて見たときに覚える、もう体の芯が震えるようなあの感動です。

今年、万次郎が育ったアメリカ、フェアヘブンの町で、ルーズベルト大統領のおじいさんが建てた屋敷に初めて泊まりました。そのデラノハウスの2階に続く階段は、「風と共に去りぬ」の映画の中に出てくるような階段で、階段の下には巨大な姿見が置いてある。あの屋敷が建てられた1820、30年に高さが3メートルばかりでかい姿見を注文できたその財力。

屋敷に初めて入ったとき、体の芯から震える思いをしました。資料を読むことと、その場に立って体験することとは、もはや比較になりません。万次郎はこの屋敷に何度も行っていきます。屋敷のすぐ近くには、ユニオン教会が今も残っています。万次郎は、あの時代とても高価なコーヒーや紅茶、クッキーのようなものをふるまわれ、あの豪華な家の雰囲気を感じた。そういう経験、いろ

んな初めてを万次郎は自分の中に蓄えてきています。龍馬も同じでしょう。長崎の景色。日本で初めてハネムーン。万次郎も龍馬も、初めてということを出る。ほど自分の体の中に取り込んでいる。肖像写真とて同じです。ここに私は学ばべきことを数多く感じるんです。これぞ土佐人だと思ふことがあります。

土佐人の心根

龍馬や万次郎の時代、社会には、無いものがあふれていました。ほとんど無いものばかりだったといってもいい。そこへ万次郎はアメリカの先端の文明を持ち帰ってきた。母親にミシンをおみやげに持って帰ってきた。万次郎の母親に対する心根が強く響いてきます。それが人です。それが土佐人です。

龍馬が、新しい物好きでブーツや拳銃を持ち、写真を撮り、時代と関わったことも、その場に居合わせる龍馬という人間の一生をささえてきたことに他ならない。

星の強さということとは、みんなに公平ではないかもしれない。その星の強さをもって生まれた人間に

は、星の強さを生かしていく義務がある。龍馬はそれをいろいろやってきた。惜しむらくは若くして命を果てたんですが、でも、生きている中で、残してきた足跡は無限に大きいです。

土佐人気質にある「生きるヒント」

今日のテーマ「21世紀を生きていくヒント」は、私は土佐人の気質の中に、色濃く潜んでいると信じています。ひとつは、いちびり（お調子者）体質です。これ絶対大事。自分でやりたい、見てみたいということ。私は、龍馬は図抜けたいちびり男だと思っている。

ピストルを持っていた龍馬は命を果つる時に、一発の弾も撃たなかった。また慎太郎は、亡くなるまで慎太郎に撤出して、瀕死のまま異変を告げに抜け出している。二人とも本当に大した男だと思ふ。龍馬は龍馬の人生を全うしたでしょう。心ならずも命果てたが、やることはやった。

万次郎は名を求めています。明治政府に入らなかつた。ハワイで一緒だったデーモン牧師が後に日本を訪れて、万次郎の遇され方に憤りを覚えたという記述がある。私は、万次郎はそれよかつたと思つていると信じています。自分で成すことはやらなければいけない。でも口は閉じていよう。

龍馬も万次郎もそうやって生きて、寡黙だった。自分を語らないでも、周りが語ってくれます。私はそれが土佐人のひとつの生き方だし、気前のよさだと思ふ。

今は「俺が、俺が」と前に出る人が多い。恥じらいを捨てている。しかし、土佐人とは「おんしゃあ、そんなみつともないことやめちよけや。それでも土佐人か」と言う人です。私はそんな土佐人であることを誇りに思っています。龍馬や万次郎を一行書きたび「そうだよな。こうやって生きていこうよな」と思ふのです。



テーマ「時代の絆」

現代龍馬学会は5周年を迎えた。5月11日、150人という最多の参加者とともに、節目である記念の総会及び研究発表会が開催された。

総会では、片岡雅文会長のおいさつ、森健志郎事務局長より24年度事業報告、決算報告、監査報告が行われ、会員の承認を得た。

25年度は、記念館機関紙「飛鷹」学会紙面(4ページ、年4回発行)の活用と月例会の充実を図り、会員同士のつながりを深めていく。昨年に続き、会員拡充が今後の課題であり、事業内容の再検討や工夫を重ねることなどを確認した。

来賓あいさつとして、高知県教育長・中澤卓史氏が「市井の方が龍馬を研究し続けることは、龍馬を顕彰し上げることに繋がる」と述べた。

また、学会顧問で郷土坂本家九代目・坂本登氏(東京在住)は、「龍馬の卓越した発想力、情熱、行動力、強い意志を受け継いで、この高知から日本に、世界に向けて、新しい風を送り続ける」と開会あいさつ。理事・竹内土佐郎氏による「龍馬甚句」にも大きな拍手が起った。発表は年々充実しており、講師で作家の山本一力氏を囲んでの懇親交流会も、今までの盛り上がりを見せた。

さまざまな視点の発表に会場沸く

第5回 高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 研究発表



宣言

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は、二〇〇九年四月の発足から五周年を迎え、県内外から百四十六人が参加して第五回研究発表会を開いた。テーマは「時代の絆」。一昨年の東日本大震災以来、社会のあり方が問い直されようとしているとき、龍馬とその時代に学び、人と人とのつながりの大切さを考えようとしたものだ。

直木賞作家の山本一力さんをお招きして二十一世紀を生きるヒントについて記念講演をいただき、県内外の六人の研究者が日頃の研鑽に基づいた発表を行い、私たちは多くのことを学んだ。

わが国は近年、アジア諸国との緊張が高まり、国内では改憲論議が盛んになっている。このようなときこそ、私たちは龍馬らの生きた激動と変革の時代に学び、誤りのない道を一歩一歩歩んでいきたいと思う。

平成二十五年五月十一日

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会



① 前田由紀枝氏 (坂本龍馬記念館 学芸主任)

「龍馬」を守ってきた男たち

坂本弥太郎と弘松磯之助



語られることの少なかった二人を紹介

国指定重要文化財となつている京都国立博物館所蔵の坂本龍馬関係資料は、郷土坂本家7代・坂本弥太郎氏

らが寄贈したものである。また、龍馬記念館に寄託されている龍馬関係資料の中では、坂本家縁者・弘松家のものは貴重で、7代弘松磯之助の功績が大きい。貴重な龍馬資料が守られた経緯や、今まで語られる機会が少なかった坂本弥太郎と弘松磯之助について紹介。二人に焦点を当て、龍馬をめぐる家族や時代の絆を考察した。

② 森本邦生氏 (広島県立佐伯高等学校)

「同じ時代を生きた者達の剣」



剣術の実演映像を交えリアルに

武術の修行は単に戦の技術の取得のみではなく、物事の考え方も影響を与える。坂本龍馬に縁があった者達がどのような流派を

修行したのかを考察した。北辰一刀流、小野派一刀流(中西派)、直心影流、神道無念流、大石神影流など、幕末に活躍した人物が修行した流派の特徴を述べた。これらの流派を学んだ人たちが幕末の動乱期に活躍したのは剣術修行と無関係ではなかったことを紹介した。森本氏自身が武術家であり、実演や竹刀の紹介など興味深かった。

③ 岩崎義郎氏 (千原談話会理事・著者 法大生 觀光ガイドボランティア検定)

「お龍さんの生涯(晩年を中心に)」



軽妙な語り口で

お龍さんの生涯を、龍馬との出会い、寺田屋事件、霧島への新婚旅行をなぞりつつ、龍

馬の死後の晩年を中心に考察した。高知坂本家での様子、西郷を訪ねた時、坂本直を訪ねた時、料亭・田中家での様子、戸籍について等、多数のエピソードを新聞・雑誌記事を中心に紹介。軽妙な語り口で会場には笑いも起こった。

④ 豊田満広氏 (中岡慎太郎館学芸員)

「中岡慎太郎の思想について」

「時勢論」を中心に



慎太郎の本当の思いとは

慎太郎の政治思想は、「時勢論」の文言を引用して、「武力討幕」であると捉えられている。だがその後に書かれた「窃ニ示知己論」「愚論窃カニ知己ノ人ニ示ス」「時勢論」

と併せて読むと、その評価が当たらないことがわかる。これら4つの論議は、幕末期の日本の政治状況および海外情報を冷静に分析して、欧米諸国と対等に交際するために必要な事柄について述べている。日本が独立国家として、欧米諸国と対等に交際する慎太郎の思想について述べた。

⑤ 右近浩幸氏 (兵庫龍馬会)

「龍馬は神戸で何を学んだか」

神戸海軍操練所に学んだ海援隊の運営手法



地元神戸からの考察を

神戸海軍操練所は、勝海舟が発案した西日本中心の海軍育成機関であり、坂本龍馬も所属していた。しかし、神戸海軍操練所に

関する史料は非常に少なく、どのような組織であったかさえ明確にはなっていない。数少ない史料を調べていくと、神戸海軍操練所の運営内容は、龍馬に多大な影響を与えていたことが分かる。後に龍馬自ら運営を行った亀山社中、海援隊は、神戸海軍操練所で得た知識が基礎となつていたことを考察した。

⑥ 窪内隆起氏 (元産経新聞司馬遼太郎氏担当記者)

「司馬遼太郎のこと」



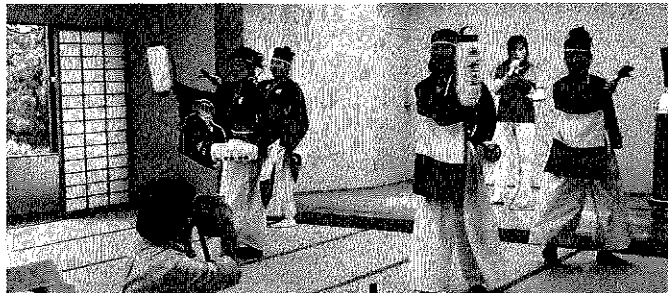
担当記者が語った司馬・千夜一夜

作家・司馬遼太郎最初の新聞連載「竜馬がゆく」。この大成功により一躍人気作家となつた司馬さんは、当

時、新聞雑誌に連載17本、「坂の上の雲」の時に11本と、まさに超人的な活躍であった。歴史作家としての地位を確立したといわれる「戦国四部作」に対する作者の思いや、作者自身が一番好きな自分の作品などについて触れた。人間・司馬遼太郎のやさしさ、ユーモラスなエピソードなど時間の限り語った。



高知県教育長 中澤卓史氏
高知市教育長 松原和廣氏
郷土坂本家九代目 坂本登氏



交流会では「おんちゃん合唱団」の歌とよさこいが披露された

何の浮世は三文五厘

宮川 禎一

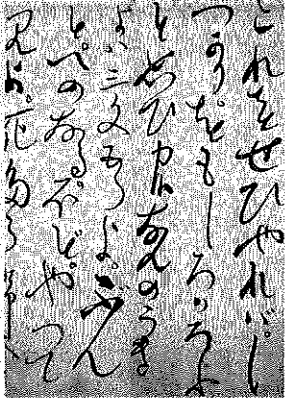
龍馬の手紙を読んでいる一著「独立自尊」。

と何げない文言に「？」と
なることがある。当時は普
通に使われていた表現が現
在ではどういう意味か分か
らなくなった場合だ。たと
えば「なんのうきよハ三文
五厘よ。ぶんと屁のなるほ
どやって見よ。死んだら野
辺の骨は白石」(文久三年
六月二十九日付乙女あて)
という表現である。姉の乙
女に全国無銭行脚の方法を
伝授する場面に現れる文言
だ。姉に出家巡礼を勧めて
いるのだが、なんとなく軽
妙な言いまわしだと感じる。
こんな表現は龍馬だけか
と思っていたら「汗血千里
の駒」(明治十六年)に類似
の文言があった。「此方の壯
士も常日頃浮世三分と仇名
ある命知らずの中平なれば
」。井口村刃傷事件での中
平忠次郎の描写だ。「浮世三
分」とは「この世に執着の
ない様子」と註釈されてい
る(林原純正註)。

さらに福沢諭吉も使って
いる。明治八年に友
人へあてた手紙で
「文明論之概略」を
執筆した際の不安と
覚悟について「ママ
曰浮世は三分五厘、
(翻訳内容などが)
間違ったならば一人
の不調法」などと
書いている(北岡伸

一著「独立自尊」。
福沢諭吉と坂本龍馬が同
じ表現を使ったことは興味
深い。二人は天保五、六年
生まれの同世代人なので当
然である。当時の流行語だっ
たのだから。福沢の「浮世
は三分五厘」の方が一般的
な表現だったようで、辞典
では「この世のことは、そ
れほどねうちのあるもので
はないの意」と記される。
その表現の先には「なので
深刻に考えずに思い切れ」
と続くのがパターンなので
あろう。「見るまえに飛べ」か。
龍馬は慶応二年十二月四
日の乙女あての手紙で「天
下の世話は大雑把なものだ
が、命さえ捨ててかかれば
面白いものだ」と書いてい
る。そこにも「何の浮世は
三文五厘」と同様の死生観
が表れているといえよう。

文久三年六月二十九日の坂本
龍馬の手紙(部分) 乙女あて
京都国立博物館蔵 重文



“話してみるかよ”

戦争・平和・龍馬を考える

森 健志郎

今年の梅雨のように混乱の頭の中で実は考えていることがある。それが考えるほどに思いが熱くなってきて、今や消えることがなくなった。逆にますます、鮮明になってきた。是非とも聞いてほしい。

今年の8月15日(木)はそう、お盆の終わり、「終戦記念日」である。これまでも気にしないことはなかったが、今年は、いつもの年よりなぜか余計に「忘れたらいかんぞ!」そんな発信信号が心に響いてきた。それだけ世の中が騒々しいというのは間違いない。ヒステリックなマスコミ報道がその証明だと思う。それに先日、広島へ行く機会があって原爆ドームやら平和公園を見たのも刺激になったようだ。「戦争はいかん」と改めて自分に言い聞かせた。龍馬の思いがそれにダブった。「龍馬記念館からそのことを発信するアイデアはないか?」考えた時、ひらめいたのがこれだ。

「終戦記念日に誓う! 第1回夏休み子ども・龍馬フォーラム」。坂本龍馬記念館に来館者が龍馬に手紙を書く「拝啓龍馬殿」というのががあるが、書く人は大人も子どもも皆さん龍馬に熱い。その手紙の中から10人、さらに地元の龍馬好きを選び15人ほどの小中学生で「平和、戦争、龍馬」を考えるフォーラムである。コーディネイトするのは、3人の学芸員と館長、フォローするのはボランティア。その熱い論議の中から、大人には見えていない混乱の現代を乗り切るヒントを探そうと言うわけ。何か「原点に返れ」のような答えがかえってきそうな予感がする。

「坂本龍馬記念館」、「現代龍馬学会」、「坂本龍馬財団」の合同のフォーラムとして盛り上げて、毎年終戦の日のイベントとして定着させたいと考えている。是非、参加してほしい。お願いいたします。

コラム・龍馬のこと

「龍馬は今も生きている」

森澤 正典

今年も「現代龍馬学会総会」の終了後の懇親会で、私たち「おんちゃん合唱団」は「龍馬は今も生きている」を歌わせていただいた。この歌は、約40年程前に流行した歌である。私が30代の頃のことだ。歌って歌って歌い抜いた歌である。ところが、その後、40代50代と年を重ねるごとに、いつしか誰も歌わなくなった。皆、忙しかったのだ。

そして60代を迎えた。年老いてゆく自分に不安を感じる年代になった。そんな時に、段々と元気を失ってゆく自分自身を励ましたいと立ち上がった「おんちゃん」がいた。のちに「おんちゃん合唱団」の団長となるOさんである。自分を励ます歌は、昔に燃えて歌っていた「龍馬は今も生きている」と考える。「龍馬は今も生きている、若い俺らの燃える血に」の歌詞を歌う時、五体に元気が注入される事に気づく。もしも千人で歌えば、千人が元気になる。そう確信した彼は「シキデン」など有名レコード店を探し廻る。でも、どうしても見つかることができない。

Oさんが「龍馬合唱団」の存在を突き止めたのは、一年後のことであった。ピアノの演奏で歌っている彼等の「龍馬は今も」のテープを大量に複製すると、Oさんは知り合いにばらまいた。賛同者が増え始め、20数名のおんちゃん達が名乗りを上げた。徐々に活動の場が広がっていった。

そして、平成23年5月28日に開催された現代龍馬学会の懇親会で17名の「おんちゃん」が合唱できたのである。五体に元気がみなぎっていく。あの時の感動は今も忘れない。私は今後も「龍馬は今も生きている」を歌い続けていきたいと思う。「龍馬は今も生きている、若い俺らの燃える血に」と。